明治 43 年京都の洋楽事情

―ある商家の若妻の日記を基に―

塩津 洋子

The State of Western Music in Kyoto in the Year 1910

―Based on The Diary of a Merchant's Young Wife―

Yohko SHIOTSU

This essay is an attempt at illuminating how phenomena relating to Western music were experienced in the actual lives of citizens of Kyoto in the year 1910. It is based on the descriptive content pertaining to Western music that appears in the book "Kyoto 1910: The Diary of a Merchant's Young Wife" (by Takuya Nakano, Shin-yo-sha, 1981) and has been supplemented by other primary sources.

The research of the history of Western music as based on primary sources has tended to be dominated by accounts of Western music culture from those responsible for its spread. This has been problematic in that, conversely, there has been extremely little information from those who have been on the receiving end of that culture. The diary that is featured in this paper is a very valuable resource in that it contains accounts of someone who is on the receiving end of the culture, information that has been difficult to find. While it might not provide a full picture of the state of Western music at the time, this information, when combined with the accumulated information culled from research work done on accounts of Western music culture from those who spread it, should provide a snapshot of the circumstances from both perspectives.

構成

1　はじめに
2　中野万亀子の日記
3「君が代」「年の初め」
4「蓄音機」
5「ヴァイオリン」
6「オルガン」「鉄道唱歌」
7「川上劇」「お伽倶楽部」
8「音楽会」
9「ピアノ」
10　おわりに

１　はじめに

この小論は、「明治四十三年京都　ある商家の若妻の日記」(注 1)という書籍を筆者が偶然手にしたことを発端としている。同書はタイトルからわかるように、ある女性の 1 年分の日記をそのまま公刊したものである。その中にそれほど多くではないが、洋楽に関係した記述を見ることができる。京都に暮らす女性とその家族・友人たちの日常にさりげなく存在する洋楽のあれこれは、当時の一般社会に洋楽がどのように浸透していたのかを知らせてくれる、洋楽文化の受け手側からの貴重な情報である。

洋楽が明治期に積極的に受容されたことは疑いのないところだが、市民レベルつまり洋楽文化の受け手の様子を確認することは、意外に難しい。当時の状況を知ることのできる一次資料は、洋楽文化の送り手側からのものに大きく偏り、受け手側のものが極端に少ないためである。例えば演奏会に関して、誰がどのような演奏会を開いたのか、ということがわかる資料は比較的入手可能なものであるが、演奏会に足を運んだ聴衆の姿がわかる資料を入手することは困難を極める。このような一次資料の偏りが常に気にかかっていた中で、同書を知る機会を得た。同書の洋楽に関する記述は、当然のことながら、洋楽について論じているようなものではなく、「蓄音機」や「オルガン」などの洋楽関係の言葉が時折登場したり、家族が音楽会に出かけたといったような、本当に些細なものである。しかし、受け手側の記録として大変貴重であるこの日記からの情報と、これまでの研究作業によって入手した主として送り手側からの情報を組み合わせることができれば、当時の洋楽事情を、充分ではないとしてもある程度双方向的に検証することができるのではないか、と考えた次第である。

本論は、同日記に記された洋楽関係の記述内容を、他の資料情報によって補完し、明治 43 年当時の京都市民が、実際に生活の中で体験した洋楽関係の事象を、具体的に明らかにしようとするものである。

２　中野万亀子の日記

「明治四十三年京都　ある商家の若妻の日記」と題して公刊された日記は、当時 20 歳の中野万亀子という女性が日々の生活を記録したものである。その前書き部分に、筆者中野万亀子のご子息にあたる社会学者中野卓氏が、彼女を取り巻く家族・親戚・友人関係について解説している。そこには、万亀子は生家と同じ薬業を営む商家に嫁いで 3 年目の若妻であること、生家と婚家はともに明治期薬業界のリーダー的存在、生活水準的には中の上、主人忠八は新しいもの好き、姑はモダンな人、友人たちは陶工・画家・素人音楽家など多くは芸術愛好者であるといった、日記を読み解く上での基本情報が紹介されている。同解説より、生家と婚家の家族構成を整理したものが以下である。

■生家　京都二條　薬屋(やくや)中尾万七家(薬万とも)　和漢薬卸小売・洋薬販売

父　　万七

[母　　好子　　明治 42 年(1909)没]

兄　　万三　　東京帝国大学卒業。28 歳

万亀子　　明治 23 年(1890)生まれ。小学校卒。明治 40 年(1907)七世中野忠八と結婚。

妹　　営子　　女学生　15 歳

弟　　千三　　中学生　14 歳？

■婚家　京都五條　大和屋中野忠八家(大忠八・大忠)

薬種卸小売・砂糖・食料品・化粧品販売

母　　ミネ(峯)　44 歳

夫　　(七世)忠八　26 歳　第三高等学校中退(父六世病死のため)　私立京都薬学校卒業　文部省薬剤師試験合格　万亀子の兄万三の友人

京都「お伽クラブ」副会長

万亀子　20 歳

弟　　秀三郎　高等学校生　24 歳

妹　　国子　20 歳

妹　　品子　女学生　16 歳

弟　　誠一　小学生　14 歳

弟　　忠二郎　小学生　8 歳

以下、万亀子の日記に登場する洋楽関係の事象について、順に検証していきたい。
各項の冒頭に挙げた文章(太字)が、万亀子の記述原文である。その中の[　]は、編者の補足説明。次章以降の文中の『　』は、万亀子の日記記述からの引用。

３「君が代」「年の初め」

1 月 1 日　　自宅音楽室[二階の一室]**ニテ、君が代、年の初め合唱**

2 月 11 日　今日は紀元節で、学校では式がはじまる。宅でも午前十時頃に式があった。

9 月 29 日　お品さんの学校へは、今日、皇太子殿下、お成りになるそうだ。

11 月 3 日　門には日の丸の旗、風になびき、我が家にて、君が代にて式のはじまりたり

「君が代」は言わずとしれた日本国歌であると言いたいところだが、すでに各種の文献に紹介されている通り、明治期において「君が代」には少々複雑な事情がある。明治になっ

て以降、3 曲の「君が代」が作曲されており、“「君が代」を歌った”という文字情報だけではどの「君が代」なのかわからない場合もある。3 曲の「君が代」について整理してみると次のようになる。

①詞：「古今和歌集」(905 年)に初出の“読人しらす(ず)”の歌。現行の「君が代」と同じ。
　曲：J.W.フェントン(軍楽隊教師)
　明治 3 年(1870)～9 年(1876)頃に、国歌として使われたが、不評。

②詞：①と同じ
　曲：林広守(宮内省一等伶人)　和声編曲：F.エッケルト
　明治 13 年(1880)、海軍省が国歌として発表。以来、この曲が事実上国歌「君が代」として使われる。

③詞：1 番①②と同じ　2 番「今撰和歌集」の「源頼政の歌」　1･2 番とも、後に稲垣千頴の詞が付け加えられている。
　曲：英国古曲(S.Webb1 世？)
　明治 15 年出版(注 2)の「小学唱歌集　初篇」所収。学校用唱歌。

①は演奏した軍楽隊員たちに大変不評で、世の中に周知される以前段階で演奏されなくなったため、明治 43 年にこれを歌うことは考えられない。②は現行国歌(注 3)で、海軍省が明治 13 年に発表して以来、広く普及したものである。③は明治 15 年発行の学校用唱歌集に含まれる曲。当時、文部省は国歌制定への動きを見せていたが、結果が出ないまま立ち消えとなってしまっている。この「君が代」は国歌として創作されたものではないが、同じ歌詞、同じタイトルを持つこの曲が、海軍省が制定した②の「君が代」に代わる可能性を文部省は期待していたのかもしれない(注 4)。いずれにしても学校での唱歌教育の中でこの「君が代」が歌われ、万亀子とその家族も知っていた可能性は否定できない。

以上から万亀子たちが歌った「君が代」は可能性として②か③であるが、状況証拠的に②と考えて間違いないと思う。文部省は、明治 24 年(1891)に「祝日大祭日儀式規程」を設け、それに対応する形で明治 26 年(1893)に「祝日大祭日歌詞並楽譜」を発表した。学校での儀式の在り方を規程すると同時にその時に歌う唱歌を指定したのである。「君が代」「勅語奉答」「一月一日」「紀元節」「天長節」「元始祭」「神嘗祭」「新嘗祭」の 8 曲で、これらは儀式唱歌、祝祭日唱歌などと呼ばれた。「君が代」には②の曲が採用されている。以後、各祝日・祭日の儀式において、「君が代」とそれぞれの日の唱歌が歌われることとなり、②の「君が代」はこの時点で事実上“国歌”として容認されたのである(注 5)。

万亀子の婚家中野家では、1 月 1 日、2 月 11 日、11 月 3 日には「君が代」を歌って式を行ったことが記録されており、学校だけでなく家庭でも式が行われていた様子が伝わる。元旦には「君が代」と共に「年の初め」を歌っている。これは「一月一日」のことで、“年の始めの例(ためし)とて…”という歌い出しを曲名の代わりに言ったものと思われる。この曲は一連の儀式唱歌の中では突出して明るく楽しい曲想で、現在でも広く親しまれている。

当時は祝祭日に限らず、様々な儀式の際に「君が代」を歌うことが定着していた。その様子は、次のような新聞記事によって知ることができる。

京都市立第三高等小学校卒業式“一同入場唱歌君ヶ代の合唱にて(M43.3.27.大阪毎日新聞京都滋賀付録)”、京都第二中学校卒業式“君が代の国歌を以って式を初め(M43.4.2.大阪毎日新聞京都滋賀付録)”、婦人慈善教会起工式“開会の辞あり君が代の奏楽終わりて(M43.6.6.大阪朝日新聞京都付録)”、日本赤十字社京都支部教護員養成所授業開始式“君が代の奏楽あり生徒一同之に唱和し(M43.9.2.大阪毎日新聞京都滋賀付録)”、宗学校慶讃式“君ヶ代を斉唱し(M43.11.18.大阪毎日新聞京都滋賀付録)”、京都市教育会“先づ君ヶ代を合唱し(M43.11.21.大阪毎日新聞京都滋賀付録)”などである。

また、「君が代」は唱歌とも国歌とも認識されていたらしく、国歌としての位置付けがかならずしも完全ではなかったことを窺わせる。さらに、奏楽、斉唱、合唱、の3種の演奏形態を指す言葉が登場するが、いずれの場合もオルガンなどの伴奏にあわせて、「君が代」を斉唱したものと思われる。斉唱を合唱と言い違えることは現在でもあることで、当時合唱という言葉を正しく使用していたとは考えにくい。以上のように「君が代」は、社会の中にきっちりとはめ込まれていたのである。

なお、9月29日の記述には音楽的な事象は直接含まれないが、新聞記事によって詳細を確認すると、義妹品子の通う京都市立高等女学校に皇太子殿下が来られた折に、教師のピアノ伴奏で「君が代」「菊の杯」「修学旅行」を歌ったことが確認できる(M43.9.30.大阪毎日新聞京都滋賀付録)。

４　「蓄音機」

1月7日　**ちく音機**[松井治助から借りて来た]**がはじまりました。しかも店しまい**[店の休日なのに蓄音機の演奏が珍しいので]**多くさんの人、山の様です。**

1月15日　[正月以来、借りていた]**ちく音機もって、松井様の**[蓄音機]**を**[くに子の友達が]**。**
そして余興にちく音機はもとより…

5月13日　**森口さんのおさしずで、松井**[治助]**様より物言ふきかひ、とりよせられた。**

5月14日　**店の人は夜前にこりず、また朝っぱらから、チク音機をいじって御座る。**
余興にちく音き。

蓄音機が登場するのは、明治30年(1987)頃からである。当初はロウ管を使ったもので、録音機能を備えていたため、その場で録音・再生してみせることで、驚きをもって迎え入れられた。明治30年代後半になり、平円盤のいわゆるレコードを再生する蓄音機へと移行する。明治43年でも蓄音機はまだ、あまり普及していない。かなり裕福と思われる万亀子の家でも、蓄音機は持っておらず、主人忠八の友人松井治助から借りている状況であった。

日記によると、お正月と5月の稲荷祭の時に借りている。店員も一緒に蓄音機を楽しんでいる様子が伝わって来る。

“余興に蓄音機”という記述が日記にもあるように、蓄音機は何かの行事の“余興”によく使用された。“京都園芸総会…立食饗応中の余興としては竹中時計店の蓄音機等あり(M43.1.17.大阪朝日新聞京都付録)”“一橋同窓会発会式…余興として和洋音楽、薩摩琵琶、蓄音機、落語等(M43.2.11.日出新聞)”“「孤児の慰安会…此の間に二台の蓄音機が西洋の進行曲、俗曲、唱歌など場内に聞え渡る孤児は打ち喜んで手を打つのもある(M43.12.19.大阪朝日新聞京都付録)”など、人の集まる所で蓄音機は大活躍の様子である。

その蓄音機で何を聞いていたか、を知りたいところだが、この点については情報が少ない。日記中にもそれには触れていない。僅かに知ることのできるのは、前述の孤児慰安会で“西洋の進行曲、俗曲、唱歌など”、8 月に行われた京都の日刊紙「日出新聞」主催の大納涼会で“義太夫三十三間堂、壷坂、朝顔日記、其の他春雨、嵐山、紀伊の国、軍艦の行進等他数百種(M43.8.7.日出新聞)”が蓄音機で再生されたということである。ここから何かを読み取ることは困難だが、やはり洋楽曲の割合は少ないようだ。万亀子の家では、蓄音機の持ち主松井治助、主人忠八ともに洋楽好きであること、オルガンを持っているような家庭であること、などを考え合せると、洋楽もかなり聴いていたのではないかと思われるが、確証はない。

明治30年代から40年代、蓄音機は様々な名称で呼ばれていた。大声蓄音器、高声発音機、蓄音器、大声発音器、大声平円盤発音機などで、大きく分けると蓄音機(器)と発音機(器)の 2 系統が混在していた状態である。『物言ふきかひ(物言う機械)』とは明治 30 年代初期の蓄音機広告によく見られた言葉で、上述の大声発音器などの名称と併せて表記していたものである。人々の驚きをそのまま表現したようなこの言葉は、明治43年頃にはもはや見られないが、それを万亀子が使っているのは面白い。巷では依然として健在の言葉だったのかもしれない。

蓄音機は高価なもので、誰でも所有できるものではなかったことは、新聞記事中に“身分不相応の蓄音機を此の程まで所有し居り(M43.7.6.大阪朝日新聞京都付録)”のような表現が見られることでもわかる。広告に示された価格を見ると、12円が最低価格で、20～30円程度が標準的な蓄音機のようである。巡査の初任給は明治39年が12円(注6)、公務員の初任給は明治40年が50円、明治44年が55円(注7)、という情報があり、これを基準に考えてみると、廉い蓄音機は巡査の給料1ヶ月分、標準的な蓄音機は巡査に比べて4倍位も高給の公務員でも、給料の半分にあたる。新聞紙上にも広告が多く“賓客饗応の一助・家庭団欒の娯楽(M43.10.5.大阪朝日新聞京都付録)”“家庭に於ける唯一の娯楽・宴会席上余興の最(M43.4.21.大阪朝日新聞京都付録)”といったキャッチ・フレーズが見られる。中には蓄音機を“貸します(M43.7.14.大阪朝日新聞京都付録)”というのもある。

中野家においても、1 月 7 日に『松井治助から借りた蓄音機の再生がはじまると、店の休日なのに蓄音機の演奏が珍しいので、沢山の人が山の様に集まった』と万亀子は記して

いる。また、“ お祭りなどには、いつも借りてきて店員も一緒に聞くのが慣例となった”という義妹品子の話しも編者によって補足されている。いずれにしても蓄音機はいつでもどこでも音楽を楽しめる新しい文明の利器として、当時大変人気を集めていた様子がわかる。

５「ヴァイオリン」

１月 15 日　鍋島様のヴァイオリン独奏がありましたと。それはそれはお尻からお上手[大へんなおへた。]

これは在郷軍人会の集りに出かけた忠八から、その様子を聞いたものである。余興に蓄音機と共にヴァイオリンの独奏があったという。鍋島がどのような人物であるかは不明だが、ヴァイオリンの演奏はかなりひどいものであったようだ。この記述に続いて『さすが北条さんのおでしだけあるそうです』と書かれている。京都でヴァイオリンを指導している“北条”といえば、関西音楽協会を主宰しヴァイオリンを指導していた北条静ではないだろうか。この記述のニュアンスでは、北条の指導はあまり評価されていないように窺える。

万亀子の日記にはヴァイオリンという言葉はこの 1 度しか登場しない。しかし明治 43 年頃はヴァイオリン流行の真っ只中にあったはずだ。関西で輸入ヴァイオリンの販売がはじまるのは明治 21 年(1888)頃である。その後、廉価な国産品の生産が順調に伸びたことを背景にヴァイオリンが普及し、明治 40 年頃から“ヴァイオリンの流行”が顕著になってくる。

ヴァイオリンの価格は、十字屋楽器部の広告によると国産品が 2 円～120 円、輸入品が 8 円～250 円、と表示している(M43. 7. 15. 音楽世界第 4 巻第 7 号)。一番廉いものが 2 円で、これは当時のレコード 2 枚ほどの値段である。レコードも現在に比べると相当高価なものであったので、レコード 2 枚分といっても決して廉いとはいえないかもしれないが、西洋楽器の中では手軽なものであったといえよう。

京都十字屋楽器部発行の音楽雑誌「音楽世界」創刊号(明治 40 年 1 月)には“先づ当今最も広く行はれて居るヴァイオリンの話から”ということで、ヴァイオリンについての記事を掲載している。同誌はその後もヴァイオリン関係記事を多く扱い、明治 43 年には、「近代ヴァイオリン名家小伝」という連載記事がほぼ毎月巻頭を飾っている。もっとも、これは欧米の演奏家事典のようなものをただ直訳したと見られるもので、ヴァイオリニストの名前とその略歴の羅列に終始する。当時の読者が関心を持って読んだ記事とはとても思えない。全体に高踏的なこの雑誌は市民の平均的関心を反映したものではないようだが、洋楽あるいはヴァイオリン愛好者のすそ野の拡がりがあってこそ、このような現実から浮き上

がった内容の記事も許容されたのかもしれない。

当時、市井に流行していたヴァイオリンは、主に邦楽曲を演奏するための楽器であった。「千鳥の曲」「八千代獅子」「黒髪」など邦楽曲をヴァイオリン用のピース楽譜にしたものが多数出版されている(注8)。西洋の楽器で邦楽曲を演奏するというのは、邪道のようでもあるが、慣れ親しんだ箏や三味線の音楽を西洋楽器ヴァイオリンで弾くことは、日本人としての音楽的感性と西洋文化への憧れが同時に満足できる組合せであったと考えられる。ヴァイオリンの音楽は無視して、単に演奏の道具としてだけヴァイオリンを受け入れていた状況である。それまでの箏にかわる西洋風のお稽古ごととして人気を集めていた。『鍋島様』のヴァイオリン演奏もおそらくこのような類のものであっただろう。

ヴァイオリンを指導する所は審美音楽会、明進学館、関西音楽協会、ヴァイオリン講習会などがあった。また、短歌競作会での題にヴァイオリンが取り上げられるとか(M43.4.23.大阪朝日新聞京都付録)、芸妓がヴァイオリンを弾くとか(M43.1.26.日出新聞)、といった話題が紹介され、ヴァイオリンが注目され流行している様子が窺える。

6「オルガン」「鉄道唱歌」

1月1日　自宅音楽室[二階の一室]ニテ、君が代、年の初め合唱　(3章と重複)

2月23日　…また[主人の]表具屋さんが始まって、音楽室のフスマがはれたそうで…

2月25日　…また[主人の思い付きの]虫がおこり、音楽室の[ドア方式にかえるため]テーツガイ[チョーツガイ]がうてた。おいおいとハイカラになりますよ。

3月7日　…[旦那様や松宮様たちは、松井宅の裏側にある]薬師寺様で、オルガンで、はでやかに。

9月3日　ふるめかしいが大和田[建樹]さんの鉄道唱歌を東京、神戸まで[の分を、たてつづけに]皆んなでうたったから、たまらない。室内はわんわんうなる。それに、おくにさんのオルガンでにぎやかなことってありゃしない。今日はいかな綿屋も[お向かいのいつも騒々しい綿屋も]おそれ入ったであろう。ほんとにおもしろかった。

11月15日　今日は大工がまたきて、オルガンをなほしてもらひ、大そうどう。ふちのかざりなんか、きってしまってからに、簿記代[台]のかわりにもなるし、大かわり。

万亀子の家にはオルガンを置いた「音楽室」と呼ぶ部屋があった。元旦、紀元節、天長節などの祝祭日にはこの部屋に集まり、君が代や儀式唱歌を歌っていたことが日記に書かれている。このような状況が、中野家が属しているという当時の「中の上」クラスの家庭によくあることかどうか、他に同種の情報がなく確認はできないが、オルガンを持ってい

る家庭はそう多くはなかったと思われる。主人の忠八が音楽室の襖を張り替え、ドア方式にしようと蝶番を付けたことについて、『おいおいとハイカラになりますよ』との万亀子の感想が記されている。オルガンという西洋の楽器を置いている部屋なので、少し西洋風にしたいという気分なのだろうが、襖に蝶番をつけてドア風に開閉するだけで『ハイカラ』というのは、少々微笑ましいような感覚である。

オルガンは明治 20 年代から、唱歌教育用として学校中心に普及を進めていた。明治 40 年(1907)の小学校令改正により、義務教育が 4 年から 6 年に延長されたと共に、唱歌科が必修になった。このことにより唱歌指導に不可欠のオルガンは、ほぼ全ての学校に行き渡ったと考えられる。山葉オルガンの販売統計を見ると、やはり明治 40 年の販売数が突出しており、京都府で 220 台の売上げがあったことがわかる(注 9)。この統計を作成した大阪の三木楽器店は山葉オルガンの関西総代理店であり、京都の主要楽器店である十字屋は、主に西川オルガンを扱っていた。この他にも、たくさんのオルガンのメーカーがそれぞれ販路を競い合い、明治 40 年台にはオルガン製作も工場での量産体制になって来るのである。

当時オルガンの価格は、18 円～200 円位であった。30 円位までのオルガンはいわゆるベビー・オルガンといわれる簡易なもので、標準的なオルガンとしては 40 円～60 円位である。万亀子は『ふちのかざりなんか、きってしまってからに、簿記代[台]のかわりにもなるし、大かわり』と書いているが、『ふちのかざり』とはどこを指すのだろう。この時期のオルガンには上部に木製の欄干のようなものが付いていることがあるが、それを指しているのかも知れない。その飾りを大工に切らせたと読み取れるが、何とも大胆な話である。『簿記台のかわりにもなる』といっても、高価な楽器の一部を切ったりするだろうか。大変疑問の残る記述である。それはともかく、万亀子の家のオルガンはベビー・オルガンのような小さなものではなく、縁飾りのあるようなある程度の大きさのものであったと推察される。

このオルガンと共に「鉄道唱歌」を歌って大騒ぎをしたというのは、毎月第一土曜日にすき焼きを食べるという「ビーフの会」の夜のことである。『例の御ち走で皆々おなかゞ一杯になって大浮れ』で、その勢いで鉄道唱歌を東京から神戸までを歌ったらしい。“汽笛一声新橋を・・”で始まる「鉄道唱歌　東海道篇」は　全部で 66 番までの歌詞がある。その 65 番が神戸で、“おもへば夢か時のまに、五十三次はしりきて、神戸のやどに身をおくも、人に翼の気車の恩”と歌い、続いて最後の 66 番で“明けなば更に乗りかへて、山陽道を進まゝし・・”と東海道線から山陽線に引き継いで終わる。楽しい食事会の後、皆でうたう歌としてこの曲が選ばれるには、全員がよく知っていること、楽しい気分をさらに盛り上げてくれるような歌であること、などの条件が満たされなくてはならないだろうが、この曲はまさにうってつけの歌だったのだろう。「鉄道唱歌」は明治 33 年、大阪の三木書店の三木佐助(1851－1926)が出版して全国的に大流行したものである。明治 15 年(1882)の小学唱歌の発表から 20 年余りの年月を経て、唱歌は様々な概念を形成して細分化され始めていた。その中に“地理教育”あるいは“歴史教育”という文字を冠した唱歌群がある。これは、

歌詞内容が地理や歴史の学習に役立つよう作られたもので、その代表が「鉄道唱歌」である。正式な題名は「地理教育　鉄道唱歌」で、第一集が東海道、第二集が山陽・九州・・と全国を巡って第五集まで出版された。国文学者大和田建樹(1857－1910)の歌詞に、東京音楽学校講師の上真行(うえさねみち)(1851－1937)と大阪師範学校教諭の多梅稚(おおのうめわか)(1869－1920)の 2 人が異なる曲を付けるという“競作”の形がとられたが、多梅稚の曲が大ヒットし、上真行の曲は全く歌われなかった。三木佐助は音楽隊と合唱隊を実際に汽車に乗り込ませ、歌詞の通り新橋から停車駅ごとに「鉄道唱歌」を演奏しながら、東海道、山陽道を経て九州まで、当時としては大変奇抜な宣伝活動を展開した。その効果の現われか、1 冊 6 銭で数十万部を売り上げたという。まさに“一声風靡”と表現するに相応しい状況であった。このようなヒットに至った理由は、一つではないだろう。鉄道網が整備されて鉄道への関心が高い時期であったこと、歌詞が各地を順次巡る構成がいわゆる“ご当地ソング”的性格を与えていたこと、日本人の歌いやすい四七抜き長音階で作られていたこと、軍歌で親しんだ符点のリズムを使っていたこと、地理教育と題されてはいるが、教育臭がなく万人が親しめる曲想であったことなど、数多くの要素が巧みに盛り込まれていたことがヒットに繋がったと考えられる。これに続いて夥しい数の類似の唱歌が出版されたが「鉄道唱歌」の人気に及ぶものはなかった。

明治 43 年は「鉄道唱歌」が発表されてから 10 年余り後になるので、万亀子も『ふるめかしいが』という言葉を書き添えているが、『ほんとにおもしろかった』と結んでいるように、皆で楽しめる歌として継続して愛唱されている様子が確認できる記述である。

鉄道唱歌は現在も、新幹線の車内チャイムに採用されており、100 年を超えて親しまれている名曲である。

7 「川上劇」「お伽倶楽部」

1 月 27 日　今日は少年･少女の大会が市儀[議]事堂である。さすがにおとぎびより、日本晴れ。旦那様、今朝も何だか熱があるようだからとて、[お伽クラブ役員としての出席は]お休み遊ばす。

2 月 2 日　夜分、鈴木[吉之助]様がいらっした。おとぎくらぶの事で。いよいよ五日には小波先生がおこし下さいます。

2 月 5 日　今ばんは、おとぎくらぶ[の集会がある]。・・私等は其後から森野さん等と一しょにいった。まあたくさんいらっしゃる。今ばんは大盛会。小波先生のアメリカの犬[という題のお話]おもしろく拝聞した。

2 月 6 日　昨夜は大変おもしろかった。小波先生も大変満足の様にお見受けした。午後、[旦那様は]鈴木様と御一しょに小波先生のお宿へいらした。

4月5日　何でも此月の十日に川上貞奴夫妻の教育ゲキ[劇]、楠正成を生徒に見せ様との事。そしてまた十七日にはおとぎくら部[クラブ]があるそうで、何やかやと、此月は楽しみな月ですね。

4月9日　…[雪子=兄嫁を歓迎するために]川上劇を見物する事になった。私はじめて川上貞奴とかを見たの。大変おもしろかった。何でも楠正成とボンドマンとやら、おしい事には、楠[の方]はよく見ませんでした。

4月10日　主人は今日おとぎくら部の主催で川上劇、楠正成を見にいらっした。

4月15日　今朝、久留嶋[武彦]先生より、手紙参り、今夕、京都着いたすとの事。…大急ぎで帰ってきたら、もう[久留嶋武彦]先生はさっきからきていらっしたことよ。

4月16日　今日も又晴天。[久留嶋武彦]先生おしあはせ。今夜はこちらから小波先生の[御宿の]方へお出かけなすった。

4月17日　今朝は少女世界[雑誌]愛読者連が是非両先生にとて、先生いやいやながら、七時半、二条発の列車にて嵐山へいらっした。そして引続きおとぎくら部へお出まし遊ばす予定。今日の会場は、先日出来上がった[三条寺町西入ル]青年会館ですと。午後0時半より開会。

5月31日　今朝、くる嶋先生いらっして、今夜とおひるとにケデーさんとかが主催で講演会があるので、それにいらっしゃるそうで、午後早々いらっしゃいました。主人等は今日、文士のおとぎしばいがありますので、其方へいらっした。

6月2日　今日から三日、四日と三日間、おとぎ[クラブ]の方の[主催する]しばいがある。役者は文士がよって中々おもしろそうであります。

7月4日　[旦那様は]昨今はおとぎくらぶ[の]雑誌発刊でいそがしくしていらっしゃいます。

7月10日　…おとぎくら部、冊子の裏表子[紙]が出来ましたとの事で、へんしゅう者[中野忠八]の印をするので、それに半日つぶしてしまった

7月11日　今日おとぎくら部冊子が出来てきました。中々ハイカラな美本である。

9月28日　また、ばんには[府庁の]議事堂で例のごとくおとぎくら部、七時から、誠さん、忠(ちゅう)[二郎]さん、毅さん、品さん、主人、東がわ先生、ゆりさん、忠(ただ)さん、打つれていらっした。いかにも楽しそうにみえます。今ばんはま[真]下[飛泉]先生のお話しもあるそうです。

9月29日　夜分は東側先生もいらっして、昨夜のおとぎくら部のお話しを皆んなで言ふて下した。真下様のおはなしが大変おもしろかったとの事。久る嶋先生は相変らず大もて。鈴木[吉之助]様[の話は]が大変まづかった、と。

11月1日　今ばんはおとぎくら部[の集会があるの]で、やかましくやかましくいって[お母さんを説得して]、お母さんと皆んなでゆくことになって、[その会場へ]参った。おもしろかった。

今回の小論のために抜き出した記述の中で、一番が多いのがこの『おとぎくらぶ(お伽倶楽部)』のことである。これは夫の忠八が京都のお伽倶楽部の副会長で、その友人で中野家にしょっちゅう出入りしていた松井治助が会計担当であったので、万亀子の周辺でお伽倶楽部関係の話題が必然的に多かったことに起因すると思われる。お伽倶楽部は川上音二郎(1864－1911)が始めた児童劇に端を発して、全国的に展開された子供のための文化運動である。特に口演童話の発祥の地とされる京都では、お伽倶楽部の活動が盛んであった。“お伽大会”とか“お伽倶楽部大会”などと称する集りをしばしば開催し、それらは通常お伽噺口演と唱歌などの音楽演奏を交えた構成になっている。

明治時代の日本の演劇を推進し、海外へも進出した川上音二郎と妻・貞奴(1871－1946)の一座は海外での見聞から日本では子供のための演劇が無いことに気づき、いずれも童話作家巌谷小波(いわやさざなみ)(1870－1933)と久留島武彦(1874－1960)らに協力を求め、明治 36 年(1903)に初めての児童劇「狐の裁判」「浮かれ胡弓」を発表した。スウェーデンの童話を翻案した「浮かれ胡弓」では、貞奴がヴァイオリンを弾く少年役を演じ、大好評であったという。因みに“胡弓”は当時でもヴァイオリンを指す言葉としては用いられていなかったが、“西洋胡弓”というくらいの感じで使ったのだろう。その後明治 43 年、川上夫妻は大阪に日本初の近代劇場“帝国座”を建設し、毎週土曜・日曜に小中学生を無料招待して「浮かれ胡弓」を上演した。これは子供たちに大人気で、劇中のヴァイオリンのメロディ―を口笛で真似することが流行したという(注 10)。このように川上一座の児童劇の運動が進められている一方で、明治 39 年(1906)巌谷小波、久留島武彦らによるお伽倶楽部が創設されたのである。

1 月 27 日の催しは“少年少女の大会”と称して京都市議事堂で開かれたもので、お伽噺などの他に有志少女による“唱歌合唱”があった(M43.1.27.大阪朝日新聞京都付録)。

2 月 2 日の日記には『いよいよ五日には小波先生がおこしくださいます』と期待感をもって書かれている。5 日の催しは 1 月と同様、京都市議事堂で開催された。米国から帰国した巌谷小波を歓迎するという趣旨で、新聞は“叔父さん歓迎会”という見出しを掲げ、詳細な報告記事を出した(M43.2.7.大阪朝日新聞京都付録)。音楽系の出し物は、“蓄音機”“米国国歌”“歓迎の歌”が確認できる。記事によれば“二千有余名”が集まったとのことで、『今ばんは大盛会』という日記の記述とも合致する。万亀子は翌日の日記にも振り返って『昨日は大変おもしろかった』と書き込んでおり、お伽倶楽部の催しを非常に楽しんだことが窺える。

他の資料で確認することができないが、4 月には京都で川上音二郎・貞奴の公演があったようだ。9 日に万亀子が兄嫁と見に行き、翌日 10 日には忠八が「おとぎくら部の主催で」ということで出かけている。5 日夜に京都お伽倶楽部会長・鈴木吉之助が中野家を訪ね、万亀子が『何でも此月の十日に川上貞奴夫妻の教育ゲキ、楠正成を生徒に見せ様との事』と記しているのが 10 日に忠八が川上一座へ出かけた件である。音二郎・貞奴も児童劇公演を続け、お伽倶楽部と同様の趣旨をもった活動を行っていたことがわかる。

5 日の記述の続きに『そしてまた十七日にはおとぎくら部があるそうで、何やかや、此

月は楽しみな月ですね』と書かれている催しは、“お伽倶楽部春季大会”として新築なった京都基督教青年会館で開催された。「君が代」の他、「お伽倶楽部誕生日の歌」をお伽唱歌隊が歌った(M43.4.17.大阪朝日新聞京都付録、他)。お伽倶楽部が“産まれてから四年になり十七日はその誕生日(M43.4.19.大阪朝日新聞京都付録)”とのことであるが、これは同倶楽部のいわば“本部”の発会から数えてということで、京都のお伽倶楽部は明治 40 年に始まる(注 11)。この 17 日の会には、東京から巌谷小波、久留島武彦も来京しているが、東京では 4 周年記念の催しを開催しなかったのか、疑問である。この時久留島は中野家に宿泊している。万亀子自身もお伽倶楽部運動の中心的人物との親密な係わりあったことが、日記中の記述の多さにも関係しているだろう。

5 月 31 日の『今朝、くる嶋先生いらっして、今夜とおひるとにケデーさんとかが主催で講演会があるので』との記載は、6 月 1 日の間違いではないかと思う。新聞 2 紙(M43.6.1.日出新聞・大阪朝日新聞京都付録)に記事があり、1 日の 3 時から京都基督教青年会館で日英社交倶楽部がお伽噺会を開催している。それによると『ケデーさん』は大学教師で日英社交倶楽部の発起人らしい。“東京久留島武彦氏のお伽噺其他数番の音楽演奏会ある由”さらに“同夜七時より同会館に於いて同様講談会を開き”とのことで、日付け以外の内容は日記と記事が合致する。

9 月 28 日の記述では『また、ばんには[府庁の]議事堂で例のごとくおとぎくら部』とのことだが、これについては、検証する資料が入手できなかった。9 月末から 10 月初めにかけての時期に皇太子が京都に来られたため、新聞紙面はその話題満載で、お伽倶楽部のために紙面を割く余裕がなかったのかもしれない。『例のごとく』と表現していることから、この催しは特に変わったものではなく、お伽噺口演と唱歌演奏などがあったと推測される。

11 月 1 日記載の『おとぎくら部』は、巌谷小波も来京して京都市議事堂で開かれた“お伽倶楽部秋季大会”(M43.11.1.日出新聞・大阪朝日新聞京都付録)である。お伽噺など 3 件の他、音楽関係では“お伽倶楽部の歌　お伽唱歌隊”“お伽唱歌　我帝国　男児唱歌隊”“お伽唱歌　日の丸の旗　女児唱歌隊”があった。

この他、7 月頃の万亀子の日記には、忠八がお伽倶楽部の雑誌を作っていることに触れているが、この雑誌の内容は残念ながら確認できていない。催しの際に歌われる唱歌、例えば「お伽倶楽部の歌」などの楽譜が載っている可能性は高いと考えられる。

以上のように、お伽倶楽部の活動は児童文学だけでなく、唱歌等の音楽的要素も含まれたものであった。子供を対象とした文化活動は、童謡の“赤い鳥運動”など、大正期にさらに発展することになる。

８「音楽会」

4 月 23 日　　主人、おくにさんは、[京都府立]**第一女学校に、東京より音楽学校の生徒が来**

て音楽会をやるとの事で、午後、早くお出ましになった。

10 月 19 日　…主人、今ばん[三条の]青年館で音楽会。柴田さん[柴田環=三浦環カ]のソロがあるので、十時すぎ帰宅。おもしろかったとの事。

この年、中野家の人たちは音楽会に 2 回出かけている。いずれも万亀子自身は出かけていない。したがって、忠八などが出かけたという事実を記しているだけであるが、淡々とした書きぶりから、音楽会に出かけることが生活の中で、特別なことでない様子が伝わる。

4 月 23 日の音楽会は、“京都音楽会臨時演奏会”として京都府立第一高等女学校講堂で開催された。京都音楽会は、明治 35 年(1902)に吉田恒三(1872 - 1957)(注 12)が呼びかけて設立した教育関係者による組織であり、京都における音楽集団の先駆けと言われている。元東京音楽学校長村岡範為馳(1853－1929)を顧問に、各学校長クラスの人物を評議員として発足し、当初一般会員は 240 名余りであった。演奏会や講習会の開催などの活動を続けながら、組織を大きくしていたが、明治 38 年(1905)をピークに徐々に下降線を辿っていた。そのような中で、復活を期しての“臨時演奏会”であったようだ。

関西方面へ演奏旅行に来た東京音楽学校教員生徒約 50 名を招聘して開催したもので、当時としては特筆すべき本格的な洋楽演奏会であった。合唱、ピアノ独奏、独唱、オルガン独奏、など 10 数曲が生徒によって演奏され、翌日 24 日の新聞に詳細な曲目が報じられた(M43.4.24.日出新聞)(注 13)。記載が不完全なものが多く、曲の特定は難しいが、“合唱　花(瀧廉太郎)”“ピアノ独弾アンプロンプチユー(シューベルト)(注 14)”“四部合唱フリユーリングス、グルツス(シユーマン)(注 15)”“ヴァイオリン独奏コルンドライ(ブルツフ)(注 16)”“オルガン独奏パイテイタ(バツハ)(注 17)”“ヴァイオリン独奏フユーリングス、ソナタ(ベトーヴエン)(注 18)”などは、ある程度推測できるものである。

これらの他、同行の教師ハンカ・ペツオルド(1862－1937)によるショパンのノクターンなどピアノ独奏と独唱が披露された。H.ペツオルドは前年の明治 42 年(1909)に来日、この年東京音楽学校の教師になったばかりである。オペラ歌手としてヨーロッパ各地で活躍していた程の人物であるから、さすがに他の演奏とは水をあけた出来栄えであったようで、新聞には絶賛の言葉が並んだ。“何れも学校秀才連の顔振れにて頗る聴衆を感動せしめたるが殊にハンカ教授の演奏は関西地方にて容易に聴かれぬ聴物にて発声の姿勢、ソプラノの美声、玉を転ばす妙音には満堂恍惚として酔える如く流石欧州一流のピアニスト、独唱家たる事を現示して拍手鳴りも止まず女学生は何れも狂喜の体なりし(M43.4.25.大阪毎日新聞京都滋賀付録)”といったものである。まだ、本格的な洋楽に触れる事の少ない当時の新聞記者や聴衆が、これらの演奏に対してどの程度の判断ができたか多いに疑問がある。明治 41 年(1908)の京都音楽会第 12 回演奏会の報告記事中では“ドウモ邦人の多くは吾々も同じ仲間であるが洋楽の趣味が十分に分らない(注 19)”と記されている。このあたりが当時の人々の本音ではないかと思う。

いずれにしても洋楽教育の総本山である東京音楽学校の生徒と西洋人の教師の演奏を聴

こうと 1300 人余りの人たちが詰めかけた(注 20)。その中に、主人忠八と義妹国子もいたわけである。二人の感想を知りたいところだが、残念ながら日記には何も書かれていない。それは、万亀子の印象に残るような発言がなかったから、と解釈するならば、二人はそれほど感動しなかったのかもしれない。京都音楽会はこの演奏会開催により一時隆盛を回復したが、大正期に入って間もなくその幕を閉じた。

10 月 19 日の音楽会は、岡山孤児院が開催した慈善音楽会で、10 月 18 日〜20 日まで 3 日間、三條の基督教青年会館で開催された。忠八はその 2 日目に出かけたようだ。岡山孤児院は、石井十次(1865−1914)が明治 20 年(1887)に創設した日本で最初の孤児院である。岡山と石井の生地宮崎を拠点に最大時には 1200 人もの孤児を養っていた。明治 30 年頃から孤児による音楽幻燈隊(のちには音楽活動写真隊)を組織して全国を巡業して回り、寄付金を集めた。これはクラリネット、コルネット、大太鼓、小太鼓などによる音楽隊と幻燈や活動写真を組み合わせたもので、いわば小さな移動映画館のようなものである。しかし、明治 41 年(1908)には 5 隊あった音楽隊の活動を、収益率や教育上の問題から停止してしまった。したがって、この 10 月 19 日の慈善音楽会は音楽隊とは無関係に、洋楽・邦楽双方の演奏者を招いて開かれたものである。中でも“現下我が国声楽界の名花と呼ばるゝ(M43.10.14.大阪朝日新聞京都付録)”柴田環(1884−1946)の出演が注目を集めた。彼女は“日向の茶臼ヶ原に三百の孤児を養うて開墾の業を授け、岡山の院裡に八十の女児を慰め県下の里子に二百近い乳児を育て、大阪には幼児保育預所と夜学校を貧民部落に整へ京都にも今やこの慈悲の手を伸ばさんとする岡山孤児院(同前)”の“挙を賛して得意の独唱を演ずることを諾し(同前)”たという。万亀子の日記にも『柴田さんのソロがあるので』と書いてあり、忠八が音楽会に出かける目的にもなっている。

彼女が歌ったのは“ブアビーヤフオンセビーラ、ロシニー作曲其の他(M43.10.14.大阪朝日新聞京都付録)”とのことで、これは G.ロッシーニ作曲の歌劇「セビーリャの理髪師」中のロジーナのカヴァティーナ「今の歌声は心にひびく」ではないかと思う。その演奏に対し“息を殺して耳を傾ける静かな場内の空気の中に流れて、人の声とよりは天人の楽の音と聞えたのに感服した(M43.10.20.大阪朝日新聞京都付録)”とか、“成程其の神韻幽妙たる美声には感心したが遂に何のことか分らず五里霧中の感がないでもなかった、蓋し斯の如きは少数の人にのみ解る天才芸術であろう(M43.10.21.日出新聞)”といった感想が新聞紙上に出た。心から感動したのではなく、“素晴らしい演奏であるはず”という既成概念的なリアクションのように受取れるものである。日記には『おもしろかったとの事』と記されている。これは柴田環の演奏に対してとは思いにくい言葉である。催し全体について言ったのか、あるいは、この音楽会では音楽の他に狂言や浄瑠璃なども演じられているので、そのような出し物が『おもしろかった』と言ったのであろうか。『柴田さんのソロがあるから』と出かけたにもかかわらず、彼女の歌唱に直接言及していないのは、やはり新聞記者と同様“遂に何のことか分らず五里霧中の感がないでもない”といった気分であったのかも知れない。忠八は

後に、チェロやヴァイオリンなど音楽愛好家のグループ「カシオピア楽団」のマネージャーを務めるような人物であるが、本格的な洋楽にはまだ少し距離感があったように見受けられる。

９「ピアノ」

9 月 23 日　松井[治助]様より[主人に]**電話かかり銅駝**[小学]**校にピアノ古きもの百七十円とかで買へたそうであるので、みがてらテンラン会の手つだひがてら、きてくれよとて、やかましくいわれるので…**

『ピアノ古きもの百七十円とかで買へた』とのことである。当時、国産ピアノの最低価格はアップライトが 300～330 円位、グランドが 700～750 円、外国製のピアノはおよそその 2 倍の価格であった。銅駝小学校に入ったピアノがどのようなタイプのものかについては不明だが、一番廉い国産ピアノの半値くらいで購入できたことになる。『古きもの』つまり中古品ということであろうが、明治期において、ピアノはまだ僅かしか普及しておらず、中古品が流通するような状況ではなかった。しかし、日本在住の西洋人が帰国の際にピアノを処分するようなことは時々あるので、このピアノもそういった偶然の機会を捉えて入手したものかもしれない。

ピアノは、主として音楽会などの催しの会場になるような公共施設や、学校に置かれており、その数は設置場所が確認できるもので京都府下に 35 台である。未確認のものがかなりあると推測できるが、それを見込んでもせいぜい 100 台くらいだろうか。小学校では、この銅駝校の他に、桃薗校、豊園校、修道校にピアノがあったことがわかっている(注 21)。銅駝校は、43 年の一時期預かっていた忠八の姉の長男毅夫が通う小学校であり、修道校は忠八の母校であり弟誠一が通う小学校である。当時は地域住民が、学校へピアノやオルガンなどのいわば高額教育用機材を贈ることがしばしばあり、日記の『松井さまより電話がかかり…みがてら…きてくれよとて、やかましくいわれるので』という記述から、音楽愛好家の松井治助がピアノ寄附の労をとり、思いがけず廉く買うことができたのでこの“手柄”を忠八に見せたくて電話をかけて来たと、類推することもできる。

この年、東京音楽学校湯原校長は“音楽教育界の新傾向　オルガンの衰退”という談話を発表した。教育現場でのオルガンピアノの関係について“音楽教員養成の目的を以って設置せる甲乙両師範科に於いては従来卒業後の実際に鑑みオルガンを以って必修科としピアノの如きは殆ど之を授くる事なかりしに近時各府県に於てピアノを備え付くる学校頗る多く殊に唱歌の伴奏の如きは到底オルガンを以ってピアノに比する事能はざる事明なれば近年に至り師範科生中より選抜してピアノを学ばしむる方針を取り現に之を実行しつつあり然れどもオルガンは地方小学校には欠く可からざる現況なるを以て師範学校にてはまだ

まだオルガンに全力を注がざるべからず(M.43.5.29.日出新聞)”と述べた。現状としてはまだオルガンが優勢であるが、これからはピアノの弾ける教員の養成も必要だ、との見解である。この時期、都市部の学校ではピアノの導入が徐々に始まり、販売統計をみても40年代以降ピアノの販売数は着実に延びている(注22)。しかし、学校のピアノは教室ではなく講堂に置かれるのが常態で、生徒の立場から言えばかなり遠い存在であったのではないだろうか。ピアノは音楽上の必要というより、到達すべき西洋化のシンボル的存在として所有者を満足させていた要素も大きいと考えている。“ピアノが入ったので見に来て”という松井治助の行動にもそのような満足感が感じられる。

10 おわりに

以上、万亀子の記述を他の資料で裏付ける形で、洋楽の各事象を説明することを試みた。日記は主婦としての立場上、食物に関することが多く、洋楽についての記述はそれほど多くないが(注23)、中野家に持ち込まれた洋楽の要素は、それが市民生活に受け入れられていた証しと考えることができる。その意味で、この日記は洋楽受容史研究にとって非常に貴重な資料である。

明治期に洋楽について書かれた文章は数多くあるが、一般市民が書いたものに限定すると極端に少ない。少なくとも、筆者が知り得たものはこの日記だけである。たとえば、万亀子の日記と同じ明治43年、京都帝国大学教授であった上田敏(1874－1916)は、半自叙伝的小説「うずまき」を発表しているが、この中に描かれている洋楽の世界は、中野家の周辺に展開する洋楽のそれとは、当然のことながら全く次元の異なるものである。また、新聞紙上に感想や意見などを披瀝する新聞記者たちの言葉も、一般市民を代表しているとは言い難いだろう。万亀子の日記に書かれたような言葉こそが、市民レベルでの洋楽受容を語るに相応しいものである。この日記は日々の出来事の羅列が多く、その内容や感想などに踏み込んだ記述が少ないことが残念ではあるが、明治43年の京都市民に係わる洋楽の世界を炙り出す、貴重な手がかりを提供してくれた。

今後、さらに同様の一次資料入手の機会を期待したい。

注

1 中野卓編「明治 43 年京都　ある商家の若妻の日記」 新曜社　1981

2 実際には明治 15 年といわれる。

3 1999 年、法律で制定。

4 嶋中鵬敏「三つの君が代　日本人の音と心の深層」p.134

5 嶋中鵬敏「三つの君が代　日本人の音と心の深層」p.192

6 週刊朝日「値段の明治大正昭和風俗史」p.203

7 週刊朝日「続・値段の明治大正昭和風俗史」p.157

8 明治 43 年 4 月 20 日付日出新聞、他多数。

9 大阪・三木楽器店「山葉オルガン販売県別計」明治 35 年～大正元年

10 荒牧金光「川上音二郎と初の児童劇公演の周辺」p.7

11 堀田穣「高尾亮雄の演劇活動」p.3

12 東京音楽学校出身。明治 35 年京都師範学校着任。

13 吉田恒三「京都音楽史」p.29 に、この演奏会のプログラムが掲載されているが、新聞記事とは何曲か異なる。

14 F.Schubert のピアノ曲 Impromptus は op.90 D.899 の 4 曲と、op.142D.935 の 4 曲がある。

15 R.Schumann には Frühlingsgruss op.79 と Frühlingsgrüsse (ohne op.)というタイトルの歌曲がある。

16 M.Bruch のチェロ曲 Kol Nidrei op.47 だろう。

17 J.S.Bach のどの Partita か不明。また、J.B.Bach にもオルガンのための Choralpartita がある。

18 L.v.Beethoven の Sonate fur Violine und Klavier Nr.5 'Frühling' op.24 だろう。

19 吉田恒三「京都音楽史」p.25 に某新聞の音楽雑記に掲載されたものとして紹介されている。

20 1300 人という数字は、吉田恒三編「京都音楽史」p.29 に記載されているもの。新聞には、"無慮二千名(M43.4.24.日出新聞)" と報告されているが、当時の新聞記事ではこのような場合の数字が誇張されることが多い。

21 塩津洋子「明治期関西洋琴事情」p.17 および、明治 43 年 5 月 23 日付日出新聞。

22 大阪・三木楽器店「ピアノ販売年表」明治 35 年(1902)～昭和 17 年(1942)

23 本稿では洋楽に注目したが、邦楽についてはどうかというと、意外にも邦楽に関する記述は全くない。

参考文献

赤井励著「オルガンの文化史」青弓社 1995

荒牧金光「川上音二郎と初の児童劇公演の周辺」博物館明治村「明治村通信」第 64 号所収 1975

江頭光著「博多　川上音二郎」西日本新聞社 1996

海後宗臣編「日本教科書大系　近代編　第 25 巻　唱歌」講談社 1978

菊池義昭「岡山孤児院の音楽幻燈(活動写真)隊の活動と養護実践のかかわり」共栄短期大学『共栄児童福祉研究』第 4 号所収 1997

倉田喜弘著「日本レコード文化史」東京書籍 1992

倉田喜弘・藤波隆之編「日本芸能人名事典」三省堂 1995

櫻井美代子著「明治後期京都のある商家の食生活　ある商家の若妻日記を中心に」東京家政学院大学紀要　第 47 号所収 2007

塩津洋子著「関西洋楽文化史Ⅲ　洋楽啓蒙期　明治 28 年～37 年」大阪音楽大学音楽研究所年報『音楽研究』第 3 巻所収 1985

塩津洋子著「明治期関西ヴァイオリン事情」大阪音楽大学音楽博物館年報『音楽研究』第 20 巻所収 2003

塩津洋子著「明治期関西洋琴(ピアノ)事情」大阪音楽大学音楽研究所年報『音楽研究』第 12 巻所収 1994

嶋中鵬敏著「三つの君が代　日本人の音と心の深層」中央公論社 1997

週刊朝日編「値段の明治大正昭和風俗史」「続・同」朝日新聞社 1981

中島幸三郎著「汽笛一声新橋を　決定版鉄道唱歌物語」佑啓社 1968

中村洪介著「西洋の音　日本の耳　近代日本文学と西洋音楽」春秋社 1987

博愛社「春夏秋冬恩寵の風薫る　博愛社創立百年記念誌」博愛社 1990

堀田穣著「高尾亮雄の演劇活動　－社会劇←お伽芝居←家庭劇－」京都学園大学人間文化学会紀要『人間文化研究』第 7 号所収 2001

山崎整著「関西発　レコード 120 年　埋もれた音と歴史　第 2 部歌謡曲秘話」神戸新聞 1997 年 4 月 1 日

横田賢一著「岡山孤児院物語　－石井十次の足跡－」山陽新聞社 2004

吉田恒三編「京都音楽史」京都音楽協会 1942